

「ロシア語と日本語を対照して見るジェンダー観」

-職業を示す名詞の女性形、男性形と、動詞の「女性形」過去形を中心に-

翻訳家 小原信利

1. はじめに

ロシア語では名詞に性（男性、女性、中性）がある。職業を示す名詞は、概して男性形で代表される。詳しくみると、職業を示す名詞の男性形、女性形では意味するところが違う場合が多い。日本語ではそのような差異はみられない。ロシア語が翻訳された場合、その違いは何らかの形で翻訳先の言語にも反映されるのだろうか？ロシア語文章の日本語翻訳文章の中で、その違いはどうなっているのだろうか？

ロシア語文法上の性差：名詞の性、動詞と名詞の性の一致

動詞活用の上では、現在形、未来形には、主語の性別による違いはない。一方、過去形については、主語の性別（男性、女性、中性）が、動詞語尾に反映される。主語が女性の場合、動詞の過去形末尾は必ず、laで終わる。例えば、読むという不完了体動詞「chitati」の女性過去形は「chitala」（チターラ）となる。（以下、ロシア語のキリル文字は、読みやすさを考慮して、一般的な翻字によるラテン文字綴りで代用する。）これは、ロシア語初学者に、日本語の終助詞を連想させる。（つまり、「読んだわ。」）それでは、日本語に翻訳するにあたって、女性主語にたいする動詞の過去形は、実際はどのように訳されているのだろうか？

日本語にはない、この職業を示す名詞の「男性形、女性形」と、動詞過去形の「男性、女性」の差が、日本語に翻訳した場合どうなっているか、いくつかの例を通して分析する。

2. ロシア語原文と、日本語翻訳にみる職業を示す名詞の性の違い

2.1 ロシア語の職業を現す名詞の意味の違い

ロシア語の職業を現す名詞については、Barbara M. Mozdizerz(以下モージェシュと

略す)による The rule of feminization in Russian,1999[11]に、職業を現す名詞は、おおむね男性形であること、その女性形の作られ方、意味の差などが纏められている。モジェシュによれば、男性形から女性形を作るには、語尾に、-ka·nitsa·(sh)chtsa·itsaなどを付加するものが多い。·ikha·shaを付加して作られる女性形名詞は、特殊なニュアンスを持つ。女性形名詞は、大別すると以下に分けられる。

2.1.1 女性形と、男性形で、意味がほとんど等価であるもの

教師 uchitel' (男性形) uchitel'nitsa (女性形)
レジ係 kassir (女性形) kassirsha (男性形)

ただし文脈上、教師の女性形 uchitel'nitsa は、「村の」、「若い」といった形容詞と共に用いられることが多く、男性形は「唯一の」、「優れた」といった「良い」意味を持つ形容詞と用いられることが多い。

2.1.2 女性形と、男性形で、意味が異なるもの

書記長か女性秘書か

男性形名詞 mashnist は、機械の操作係、(鉄道)機関士、運転手、(劇場の)舞台装置係り、を女性形名詞 mashnistka は、タイピスト、縫製女工を意味する。

端的な例に、sekretar' (男性形) と、sekretarsh (女性形) がある。

sekretar' (男性形) は、形容詞、機関名等を付け加え、様々な高級官僚の職業を示すのに使われる。

官房長官 sekretar' kabineta ministrov
国務長官 Gosudarstvennyi sekretar'
国連事務総長 general'nyi sekretar' OON
書記長 general'nyi sekretar'

sekretarsha (女性形) では、単に「(女性)秘書」の意味しかなく、上記のような使われ方はない。

2.1.3 女性形は「男性形職業人の妻」を意味するもの

(意味の限定ということで上記 2.1.2 の種)

教授 professor (女性形) professorsha (女性形) は「教授の妻」の意。

「医者=brach」をあえて、女性形 brachicha とするのは、単に「女性の医者」という意味でなく皮肉なニュアンスが含まれる。

2.1.4 女性形あるいは、男性形がないもの

「(事業部、部、課) 長 nachal'nik、「技師」 inzhener、「代理」 zamestitel'などは、文法的に女性形が可能はずであるが、女性形が使われることはほとんど無い。「女性の」という形容詞を補って使われることもあるが稀である。女性形しかないものは、あまり権威の高くない職業に限られる。例えば、魚水揚げ婦 rybopriemshchitsa

総じて、高度な職業では、男性形、女性形名詞の両方が有る場合、男性形が使われることが多い。こうした状況は、職場における女性差別のパターンを反映するものであるという。モジェシュは、数値的な傾向としては、女性形が利用される頻度は減少してゆくと予想している。一方、スポーツや、舞台芸術においては、女性形名詞の頻度減少はさほどおこらないだろうとしている。職業名詞とその性別については、1986、Veshle.G、 Naimenovaniia lits zhenskogo pola po professii, dolzhinost'[14]でも、女性形名詞の形成、意味について論じている、また Comrie らによる、Sex, Gender, and the Status of Women 1996[3]では、語形成のみならず、その背後にある女性の職業進出の経緯、さらに、統語論の観点から、女性を示す名詞が男性形で使われた場合の動詞過去形の問題も論じている。

職業を示す名詞は、一般的に男性形名詞が用いられる。職業によっては、女性形名詞がないもの、男性形名詞がないものもある。総じて、高度な職業では、男性形、女性形名詞の両方が有る場合には、男性形が使われることが多い。また、女性形名詞しかないものは、あまり権威の高くない職業に限られる。また、高級な職業を、女性形で表現する場合、皮肉の意味がこめられたりする。例えば、「医者=brach」をあえて、女性形 brachicha とするのは、単に「女性の医者」という意味ではなく、好ましくないニュアンスが含まれてしまう。また似たような名詞でありながら、男性形と女性形では、意味がことなり、男性形では、より高度な職業を、女性形では、限定的な職業

を示したりする。また同じ職業の女性ではなく、該当職業の男性の妻を指したりする場合もある。モジエシなどにより、現実社会での差別の反映であると論じられている。

[10]

2.2 小説「女達のデカメロン」中の職業を現す名詞の検討

地位の高い職業は男性形

ロシア語の職業名詞は、実際にそうした使い方をされているのだろうか？そして、日本語翻訳された場合、原文の性別は、どの程度日本語化して表現されているのだろうか？

ここで、女性の登場人物が多い、ユリヤ・ヴォズネセンスカヤによる小説「女達のデカメロン」中の名詞を、原文(1992, Tomas, タリン)と訳文(1993 群像社、法木綾子訳)とで比較した。ちなみにヴォズネセンスカヤはロシア・フェミニズム運動の著名な先駆者の一人である。[11]

原文から、登場する女性達の職業を表現する名詞を 94 抽出した(語形の異なるものは複数カウントした)。そのうち男性形名詞は 25 と少ない。

2.2.1 男性形で使われている女性の職業名のリスト

1. ボイラー係	kocheGAR	男性形
2. ミシンの修理工	mekhanik po shveinyM mashinam	男性形
3. レニングラード市議会文化担当	rabotnik Upravleniia kul'tury Leningradskogo gorispolkoma	男性形
4. 医者	vrach	男性形
5. 宇宙飛行士	kosmonavt	男性形
6. 演出家	teatral'nyi rezhisser	男性形
7. 技師	inzhener	男性形
8. 共産党員	kommunist	男性形
9. 勤労者代議員	deputatov trudiashchikhsia	男性形
10. 軍医	voennyi vrach	男性形
11. 作業班長	brigadir	男性形

12. 市議会委員	rabotonik gorisporkom	男性形
13. 助手	pomoshchnik	男性形
14. 照明係	osvetitel'	男性形
15. 食肉コンビナートの工場長		
	direktor miaso kombinata	男性形
16. 生物学者	biolog	男性形
17. 生物学博士	doktor biologicheskikh nauk	男性形
18. 掃除婦	dvornik	男性形
19. 大尉	kapitan	男性形
20. 党官僚	rabotnik nomenklatura	男性形
21. 年輩の女性の職長		
	master pozhilaia uzhe zhenshchika	男性形
22. 婦人服のデザイナー		
	khudozhnik po damskomu plat'iu	男性形
23. 文化大臣	ministr kuritura	男性形
24. 模範的労働者	peredovik proizvodstva	男性形
25. 要職	otvetstvennyi rabotnik	男性形

このうち 5 つの名詞を例外として、残り 20 は、モジェシュらが指摘するように、どちらかといえば高級な職業、職位である。[10]

こうした名詞も、日本語翻訳されてしまうと、この 25 の名詞が、男性形で、比較的「高級な職業、職位」であるということは読みとれない。

日本語で刊行されているロシア語教科書では、職業名詞の「性差」についてはほとんど触れられていない。初歩段階、あるいは読むことを主とする状況であれば、そうした「性差」はさほど意識せずにする。しかし学習レベルが上がり、会話あるいは、ロシア作文をする場合、こうした名詞の性別による「職業の高低」意識の差異について、その是非はともあれ、基本的知識は必要であろう。

3. チューホフの「桜の園」「ワーニャ叔父さん」にみる動詞過去形女性語尾の翻訳

ロシアにおいて、先に 2.1 で触れたように、主語の性と動詞過去形の対応がどうあるべきか、という問題があることが意識されるようになっていく。[3] 翻って、日本語の場合、主語の性と、ロシア語の動詞に照応する、文末はどのようになっているのだ

ろうか? 動詞過去形の女性語尾翻訳がどうなっているかを見るため、チャーホフの戯曲「桜の園」と「ワーニャ叔父さん」の二点の翻訳を分析した。

「桜の園」の日本語訳は、中村白葉訳 (1932、新潮文庫)、湯浅芳子訳 (1962、岩波文庫)、および小野理子訳 (1998、岩波文庫) の 4 つである。「ワーニャ叔父さん」訳は神西清訳 (1954)、小野理子訳 (2001、岩波文庫) の 2 つである。女性発言中で、過去形動詞 (・la) のみに限り、それに対応する日本語訳の文末の終わり方 (女性に特徴的な終助詞の有無) を比較した。

3.1 「桜の園」の日本語訳

ロシア語原文では、女性発言で過去形のもの、文章数にして 51 ある。(動詞過去形の数は 65)

これに対して、日本語翻訳では、中村白葉訳 (1932) で、女性に特徴的な終助詞を文末に加えているものは 31 である。また、神西清訳 (1954) では 23、また湯浅芳子訳 (1962) では 20、小野理子訳 (1998) では、17 である。一例は以下の通り。

3.1.1a Poluchila segodnia iz Parizha...

3.1.1b 今日パリからきたんですのよ 中村白葉訳 (1932)

3.1.1c 今日パリからきたの。 神西清訳 (1954)

3.1.1d きょうパリから受け取りました 湯浅芳子訳 (1962)

3.1.1e 今日パリから来た電報…… 小野理子訳 (1998)

3.2 「ワーニャ叔父さん」の日本語訳

ロシア語原文では、女性発言で過去形のもの、文章数にして 26 ある。(動詞過去形の数は 30)

これに対して、日本語翻訳では、神西清訳 (1954) で、女性に特徴的な終助詞を文末に加えているものは 18 である。

一方で、小野理子訳 (2001) では、女性に特徴的な終助詞を文末に加えているものは 13 である。一例は以下の通り。

3.2.1a I v muzyke, i v dome muzha, vo vsekh romanakh - vezde, odnim. slovom, ia byla tol'ko epizodicheskim litsom.

3.2.1b 音楽をやっても、お嫁に来てみても、浮いた噂が立つ時でも・いつどんな場合でも、要するにあたしは、ほんの添え物みたいな女なのだわ。神西清訳 (1954)

3.2.1c 音楽の世界でも、夫の家でも、ロマンスの場面でも・つまりどこにいても、わたしは、ただの端役でしかなかった。小野理子訳 (2001)

3.3 「桜の園」と「ワーニャ叔父さん」日本語訳中の終助詞数の傾向

女性に特徴的な終助詞の数は減少傾向

3.1、3.2でみたように、女性発言の過去形動詞の日本語翻訳では、新しい翻訳ほど、女性に特徴的な終助詞の数が減少していることが見られる。

もちろん、ロシア語原文については、過去の戯曲であり、変化がないのは言うまでもない。現代ロシア語の変化をみると、語彙の変化は、特にペレストロイカ以降、非常に大きい。具体的には、大量の英語語彙の流入がその一例である。その一方で、女性を主語とする動詞の過去形が・la で終わることなどを含め、現代ロシア語の文法的な変化はさほど大きくないことが明らかにされている。[3]

それゆえ、終助詞数の現象という現象は、現代日本語の変化の一断面として興味深い。この傾向を一般的と判断するには、より広汎、かつ多量な文章の分析が必要であろう。今回は、女性発言の動詞過去形の翻訳のみを対象としたが、今後、女性発言の過去形原文に限定せず、現在形原文の日本語翻訳も分析したいと考えている。

4. 名詞と動詞の性の一致の問題からみる吉本ばなな「キッチン」ロシア語翻訳

ロシア語では、3のような自然な性別対応の動詞過去形が普通である。一方「はじめに」で触れたように、名詞の性にかかわる動詞過去形の問題がある。

4.1 名詞と動詞の性の一致の問題 (文法優先か、意味優先か)

話題の主人公が女性であるのに、名詞形として男性形が使われている場合、過去形動詞は、本来の意味である「女性」にあわせて女性形過去とすべきか、文法に準拠して「男性」にあわせて、男性形過去とすべきか、という選択の問題である。意味に合

わせれば、文法から外れ、文法に合わせると本来の「性」からずれてしまう。これについては、ロシア人の中でも、男性と女性とで考え方が割れている。たとえば、*Nakonets vrach prishla*. 「=とうとう、医者がやってきた。」という表現で、主語が女医（文法上では男性名詞）の場合、動詞を女性形過去とするのを是とする男性は43.2%であるのに対して、是とする女性は82.1%である。[3]

4.2 吉本ばなな「キッチン」の母親にまつわる発言のロシア語翻訳

女性化した父親は、文法上、男性、女性いずれとして扱われているのか

上記の問題に近い例として、吉本ばななの「キッチン」の母親を巡る発言が、ロシア語でどのように翻訳されているか見てみよう。「キッチン」では、主人公（みかげ）が身を寄せる男性の友人（雄一）の母親（えり子）は、実は「父親、男性＝雄司」である。実際の母親の死後、主人公の父親が「母親」として生活している。そこで、本人、あるいは本人を巡る発言が本来の男性なのか、転換した後の母親つまり女性として扱われているか、どちらの性として翻訳されているかを見るものである。

ロシア語では、母親の発言の過去形は、女性の発言として翻訳されている。また、雄一の母親に対する表現でも、女性の発言として過去形に翻訳されている。一方、男性形の過去形が用いられている場合もある。

- 4.2.1a 「まさかこんなに店が混むなんて思ってなかったのよ」 母親（えり子）の発言
- 4.2.1b *Ia ne dumala, chto segodnia vecherom v klube budut tak mnogo raboty.*
- 4.2.2a 「えり子さんは仕事を辞めて、まだ小さなぼくを抱えてなにをしようか考えて、女になることに決めたんだって。」 雄一の発言
- 4.2.2b *Eriko ostavil rabotu, zabral menia, togda eshche so vsem malen'kogo, no ne znal kak zhit' dal'she.* (動詞は二つとも男性形過去＝下線部分)
- 4.2.3a 「ぼくを育ててくれたんだ。女手ひとつでっていうの、これも？」 雄一の発言
- 4.2.3b *Menia ona vospityvala kak odinokaia zhenshchina.*

5. おわりに

名詞の性によるニュアンスの存在は以前から感じていたものの詳細は調べずにいた。

背景を知って初めて、かつてロシア人の女性教師に対して男性形の「教師」を使い、気がついて女性形の「教師」に言いなおした時の、相手の怪訝な表情の意味が分かってくる。こちらは「性に合わせた正しい言い方」に言い換えたつもりであったのに、相手は「職業名を女性形名詞にして言い換えてもらう必要性」を感じていなかったのだ。男性形、女性形、どちらも「ほぼ等価の意味」であったためだ。こうしたロシア人にとっての「常識は」、日本人のロシア語学習者にとっての常識とは言い難い。一般的な教科書、辞書で学習しているだけでは、こうし意味の違いはなかなか身に付きがたい。動詞の女性過去形は、日本人初学者は、「終助詞」に対応すると思いきむ可能性がありそうだ。名詞、動詞のみに限らず、ロシア語と日本語のジェンダー関連表現の比較研究は、日本人のロシア語学習者にとって、また裏返せば、ロシア人の日本語学習者にとっても有用であろう。残念ながら、そうした研究結果が十分に提供されているとは言い難い。そもそもロシア語ジェンダーについての研究は、参考文献にも見られる通り、本国ロシアより、英米において積極的に行われている現状である。モジェシュも述べている通り、「どれが適切か、また会話で使った場合どうなるのか、を教えるためには、名詞の女性形の動向研究は、ロシア語の教師、ロシア語教科書の著者にとって、意味するところは大きい。」ロシア語と日本語のジェンダー関連表現の比較研究を、今後も継続してゆきたいと考えている。発表の機会を頂けたことに対して改めてお礼を申し上げる。

参考文献

- [1]Aivazova, S. G., 2001, Kontrakt "Rabotayuschei materi": Sovetskii variant: Gendernui Kaleidoskop.
- [2]Artwood, L., 1998, Gender Angst in Russian Society and Cinema in the Post-Stalin Era, *in*. S. Catriona Kelly,ed.,Russian Cultural Studies an Introduction, Oxford University Press, pp. 52-367.
- [3]Comrie, B, G. S., Maria Polinsky, 1996, Sex, Gender, and the Status of Women, *in*. S. Bernard Comrie, Maria Polinsky,ed.,The Russian Language in the 20th Century, Oxford University Press,pp.31-248.
- [4]Goscilo, H., 1995, The Gender Trinity of Russian Cultural Rhetoric Today or The Glyph of the H[ileroine, *in*. Condee, ed., Soviet Hieroglyphics Visual Culture in Late Twentieth Century Russia, Indiana University Press, 8-86.
- [5]Jane T. Costlow, S. S., Judith Vowles, ed., 1993, Sexuality and the Body in

- Russian Culture, Stanford University Press.
- [6] Kelly, C., 2001, *Refining Russia Advice Literature, Polite Culture, & Gender from Catherine to Yeltsin*, Oxford University Press.
- [7] Kirilina, A.V. 1999 *Gender: Lingvicheskii aspektui*. Institute Sotsiologii RAN
- [8] Larissa Ryazanova-Clarke, T. W., 1999, *The Russian Language Today*, Routledge.
- [9] Marinina, A., 1995, *Ukradennui son*, Eksmo.
- [10] Marsh, R., 1996, *Gender and Russian Literature New Perspectives*, Cambridge University Press.
- [11] Mozdierz, B. M., 1999, *The Rule of Feminization in Russian*, in H. Mills, ed., *Slavic Gender Linguistics*, John Benjamins Publishing Company pp.165-181.
- [12] Pushikareva, N. L., 2001, *Lingvisticheskii povорот . Mujskoi i jenskii diskursi*, in. *Genderunui Kareidoskop*, Academia.
- [13] Ries, N., 1997, *Russian Talk Culture & Conversation during Perestroika*, Cornell University Press,
- [14] Veshle. G., 1986, *Naimenovaniia lits zehnskogo pola po professii, dolzhinost'*, in *Russkii iazza rubezhom* 4:65-9,
- [15] Yoshimoto, B., 2001, *Kuchnya*, Amfora. trans. A. M. Kabanova
- [16] 井出祥子編 1997 「女性語の世界」明治書院
- [17] ウォーターズ.T (秋山洋子訳) 1994 「美女、悪女、聖女 20世紀ロシアの社会史」群像社
- [18] 現代日本語研究会編 1999 「女性のことば・職場編」ひつじ書房
- [19] 佐々木瑞枝 2000 「女と男の日本語事典」上巻 東京堂出版
- [20] 塩川伸明 1997 「ソ連史におけるジェンダーと家族」、世界歴史大系「ロシア史 3」山川出版社
- [21] 寿岳章子 1979 「日本語と女」岩波書店
- [22] 富永桂子 1995 「ロシア」、井上洋子他編 「ジェンダーの西洋史」法律文化社 pp130-160
- [23] 中村桃子 1995 「ことばとフェミニズム」勁草書房
- [24] 吉本ばなな、1991 「キッチン」福武書店
- [25] 米川哲夫編 1977 「世界の女性史 (第 12 巻) ロシア II 未来を築く女たち」評論社